

# 芝生育ては

## 地域育て

～育てる芝生 イクシバ！～

プロジェクト～

五期受講生尾木和子さん  
育てる芝生 イクシバ！

プロジェクト代表



～園に赤トンボがとぶまで～

子ども二人が通った幼稚園の園庭には、長男の通園時代、ゴムチップウレタン舗装が使用されていました。夏場は日光で高温になり、地面から近い子どもたちにとって熱いのではないかと感じていました。しかし都心での子育てとはこういうものかと最初は諦めています。

次男の通園時代、たまたま東京都で初めて校庭全面を芝生化したという小学校を親子で訪ねることがありました。学校と保護者との協働で育てられている鮮やかな芝生を目にした子どもたちは、すぐに靴を投げだし裸足で駆けまわりました。踏みしめるたびにバツタガ飛び交うその光景は、まさに楽園。教育の場にこんな場所があるなんて！と心の底から感激しました。

私は、芝生化した小学校が公立だったことから、「うちの子どもの通う公立幼稚園・小学校もできるのではないか？」と思い立ち、芝生化を目指し無邪気に声を上げ始めました。すると、幼稚園ではまもなく園庭改修がされることや園長先生が芝生化に興味を持たれていることが分かったので、芝生化した小学校とのQ&Aを繰り返しながら芝生化についていることを知りました。

ての声を集め続けました。

しばらくして園長先生を介し、造園業の方と話す機会が設けられました。そこで、芝生の維持管理をすることが最も重要であり、また、そのことが芝生化を進める上でのネックとなることも分かりました。芝生はそこに敷いて終わりではなく、最も大切なのはその後の手入れです。園児が見守る中、保護者が園庭で芝を刈るなど、芝を守っている光景が目に浮かびました。

芝生化した小学校の事例を学び、先生や保護者では「芝ボラ」という準備組織をつくり（その記録ブログのタイトルが「夢見る芝生」といいます）、行政への申し入れもしました。難航することもありましたが、どうにか園庭の半分の芝生化を実現することができました。

そしてその秋、赤とんぼがやってきて、園児全員が捕まえようと小さな園帽子を手にぴょんぴょんジャンプしている姿は、今も忘れられない光景です。

～葛藤～

しかし、やがて自分の子の通う幼稚園の園児だけが恩恵をもらっていることに居心地の悪さを感じるようになっていました。

待機児童が社会問題化し、幼稚園近くのビルにも数々の託児所や保育園ができましたが、園庭がなく、近隣のコンクリート公園で遊ぶのをしていました。そんな子どもたちにも芝生の園庭を開放できないか?と思いつつ、残念ながら実現することはできませんでした。

私はもやもやした思いを抱えながら、息子たちの卒園後もOBとして芝生の世話を関わり続けました。

### 「芝生育ては地域育て」

次男の卒園と時を同じくして、黎明橋公園が芝生広場に改装されるという話が飛び込んできました。二千平米くらいの公園を芝生にするというのです。

「幼稚園での芝生の経験を活かしてみませんか?」と声がかかりました。公園なら多くの子どもたちが来てくれます。やらないという選択肢はありませんでした。

自分一人では無理なので、幼稚園時代のママ友の助けを借りながら、団体を作りました。「育てる芝生イクシバ!プロジェクト」と名付け、公園近隣の町会・自治会の方と協働し

て芝生維持管理を行うことになりました。公園を管轄する方々も、毎週の芝刈り作業などに驚かれていましたが、区民のボランティアで実現させるやり方を理解してくださいました。

当時の公園は芝生に適した水捌けなどの設備がなく、表面の砂は貝殻もいっぱい混ざっていました。赤ちゃんがハイハイしたら怪我をする可能性があったため、作業の最初は貝殻集めをしました。次に、水捌けが悪く雨で水没する場所は、芝生がうまく育たないため、スコップで掘り起こし土壤改良をしました。

雨の中自力で土を入れ替えたりしているうちに、町会・自治会の方々に私たちの本気度が伝わり一丸となれたように思います。

こうした経験を経た後に、私は担い手養成



塾に参加しました。担い手養成塾では、「理念を大事に」と講師の方がよくおっしゃっていました。活動では、講義で学んだことを守りながら、芝生と共に、人々の輪をさらに広げていきたいと思っています。

ブログ「夢見る芝生」から始め、やがて「夢を見るのはやめて、育てよう!」に進化をし、それから八年が経ちました。芝生を育てているつもりが、実は地域も育っている…今、そんな実感があります。

# 対談

(五) 伺ったこれまでの流れを通して、この活動がとても鮮やかに「共益」から「公益」に移行されてきているなと感じました。活動の範囲がパブリックスペースへと発展している様子が受け取れました。

そこまでやるの？という人がいる反面、共感してくれる人もいる。そして、私だけが良いだけじゃなく皆が良いほうが多い、という公共性がでてきて、人がそこにシフトしていくという自然の流れがでていますよね。芝も育つけれど人も育っている。

(尾) 育つ過程では人が離れていつたりもするんです。自分の子どもが公園で遊ばない年齢になつて離れたり、世間体を気にして参加できないと言われたり。でもそれはそれでいいんです。芝は生き物だから手間がかかるし、雨が降れば心配にもなる：そこが面白いですし、ボランティアだからこそ損得抜きでとことん取り組める。最終的には、芝生に魅せられた人が残るのだと思っています。

ここはPTA的な定例活動でもなく、動員もしない出欠も管理しない。みんな日々都合もあります。

(尾) そのはあると思います。雑草取りなんて下向いて面と向かい合わない作業です。それに土を触るというのはなかなか癒し



にもなるんですよね。特に今のコロナ渦でネット漬けになりすぎたと、土を触る＝放電しにくるという人もいます（笑）

(五) 今後の野望はありますか？

(尾) 昨年、活動七年目にして令和元年度公益財団法人東京都公園協会賞奨励賞をいただきました。七年でいたくのはあまり例がないそうです。住民が手間のかかる芝生を育てているのも珍しいそうです。

すし、一年に一度の参加でも、毎週参加でも参加頻度もその人次第です。仲間です。実際に体験してみて、純粋に芝育てが性に合う人が集っているみたいです。

(五) 人間が素直にコミュニケー ションを取ろうとするとき、対面で話すことだけが正解とはいえないですね。間に焚火があつたほうが良いように：芝生が人の媒介の役割を担っているのかも知れないですよね。

（尾）それはあると思います。雑草取りなんて下向いて面と向かい合わない作業です。それに土を触るというのはなかなか癒します。古くから町を作つてこられた町会・自治会の方々と、新旧区民が手を携え、この公園に芝生のある環境を続けていきたいという同じ思いで活動しています。赤ちゃんから八五歳

までの多彩なグループです。

そしてつい最近！つくば市の方から芝生を育てるコミュニティをつくりたい、ノウハウを教えてくれないか、と連絡がありました。イクシバ！プロジェクトがつくばに飛び火して”妹分

クシバ！”ができたのです！こんな展開つてあるんだなと。芝生育ては楽しいからきっと根付くと思います。

私は真の豊かさを利便性の外に求めています。「豊かな環境」をこれからも作つていきたいと思っています。

